

ルボ●自死に向き合う僧侶たち

「自殺したら成仏できないのか」という重い問い

西出勇志
共同通信編集委員

増上寺や東京タワーが徒歩圏にある「東京グランドホテル」は、名前のイメージとは異なり、こぢんまりした静かなホテルである。観光やビジネス利用に使い勝手のよいロケーションだが、中に入ると、剃髪した僧侶の姿が目立つのに驚く。ここは宗教法人曹洞宗が経営するホテルで、宗務庁も入る曹洞宗のビルなのである。

十月二十二日午後、このホテルで宗派の研究機関である曹洞宗総合研究セ

ンターの第一五回学術大会が開かれた。布教、座禅などに関する個人発表と並び、二つの興味深いシンポジウムがあった。一つは、檀家制度が大きく揺らぎ、直葬が激増する中、葬儀の今後の在り方を問う「これからの葬儀を考える」。

そして、同じ時間帯に行われたもう一つが、「こころといのちの支援」。いささか抽象的なタイトルだが、その脇には「自殺対策と宗侶、寺族」とある。

葬儀シンポに比べると参加者は多くはない。ただ、一般も含めた聴講者は実に真剣だった。

「長野県の私の地元ではお寺のお坊さん、僧侶の皆様を『おっさま』と呼んでおります。いろんなことが相談できる存在です。今日は『おっさま』の前で、自殺対策をお話しさせていただくというのは光栄です」

冒頭、基調講演を行った東京都足立区の「こころとからだの健康づくり

課」の馬場優子課長は、こんなふうに切り出した。

足立区は自殺者を減らすための積極的な取り組みで全国的に知られる。馬場課長はさまざまな実践例を示しながら、全国で自殺者の七二%が亡くなる前に何らかの相談機関を訪れていたことを指摘し「生きたいと願いながら、かなえることができなかった方々がこれだけいる」と述べ、「自分の周りで自殺は起きない、家族には起きない、職場では起きないと思っていると、サインを見逃してしまう」と語った。さらに「自殺は心が弱い人が選択した死ではなくて、いくつかの要因が重なって、追い込まれた末の死です。そして避けることのできる死です。SOSを受け止め、一人一人が『ゲートキーパー』としての意識を」と訴えた。

「僧侶の皆様は自殺相談のプロになってほしいわけはありません。僧侶の立場で、日常でできることをやってほしいのです」

ゲートキーパー

命の門番、ゲートキーパー。近年、行政機関などがその養成を急務としている自殺対策の一つだ。自死念慮者の小さなサインを見逃さず、専門機関への相談を促す役割を担う。理髪店や飲食店など、本音が出やすい場所に勤務する人を養成の対象とする地域もある。

それでは僧侶が知りうるサインとはどのようなものだろうか。曹洞宗総合研究センターの小冊子「自死に向き合ういま、私にできること」を見てみよう。

注意点としては「早朝・深夜にお墓参りに来る」「墓石の前に長い時間留まっている」が並ぶ。確かに重要な兆候の一つと考えられるに違いない。注意を払って声を掛けることで、僧侶ならではのゲートキーパーとしての役割を果たすことができるだろう。

さらにサインに気づくゲートキーパーとしての役割だけではなく、自殺関

題に積極的に関わる僧侶たちも近年増えてきた。今回のシンポジウムの運営を担った東京都港区にある曹洞宗正山寺住職の前田有全さん（みづみ ありけん）もその一人。

「あなたのお話し、お聴きします」の紙を寺の前に貼り出し、さまざまな人々の悩みを聞き、苦しみに向き合ってきた。そんな前田さんが力を入れて取り組んでいるのが、「自死・自殺に向き合う僧侶の会」の活動だ。

二〇〇七年に「自殺対策に取り組む僧侶の会」として発足した。曹洞宗や臨済宗、浄土宗、日蓮宗、浄土真宗など、さまざまな宗派の僧侶有志で構成される。ホームページには「仏教では生死一如といって、『生』と『死』が別々であるとは考えません。『自死・自殺』の問題は『生き方』の問題です。『生死』を問い続ける僧侶として、この事態をどうにかしたい」。私たちは自死・自殺に向き合う僧侶有志の集まりです」とある。不思議に思う人があるかもしれない。自死と自殺がなぜ

併記されているのか。

自殺という言葉についてはさまざまな議論がある。「社会的に追い込まれた死」との認識が広がりがつつある現在、自分を殺すという表現がふさわしいのかどうか。さらに偏見にさらされやすい遺族への配慮もある。このため関係者の間では「自死」を用いることが一般化してきたが、ただ、「自死」の表記に自殺ほどの強いインパクトがないため、逆に行為に及ぶ心理的ハードルを下げるのではないかと懸念する声もあり、自殺という言葉を追放すべきではないとの意見もある。遺族に対しては「自死遺族」とするケースが定着しつつあるが、自死と自殺をめぐってはどのように考え方が分かれる。同会も「使い分けについては、立場や状況によって異なる」との見解の下、二〇一二年に併記する形に名称を変更した。この問題がいかに繊細さを必要とするかが、名称にも表れている。

自死念慮者や遺族に対する「自死・

自殺に向き合う僧侶の会」の活動はきめ細かい配慮が随所になされているが、まずは近年の自殺者の傾向について確認したい。

交通事故死の六倍

日本の自殺者数は二〇一二年、一五年ぶりに三万人を下回り、二万七八五人（警察庁統計、確定値）となった。ただ、前年より減少したとはいえないものの、交通事故死者数の実に約六倍に当たる。二〇〇六年には超党派の議員立法で自殺対策基本法が施行、二〇〇七年には自殺総合対策大綱がまとまったが、二〇一二年には若年層への対策、自殺未遂者への支援の強化などに重点を置いた新たな大綱が出された。平成二十五年版自殺対策白書によると、二十代の死因の半数近くを自殺が占め、長引く不況による就職の失敗や、労働環境の厳しさと結びついている。健康問題や失業、負債、生活苦、いじめ、家族の不和など、いくつもの要因が重

なった末に命が絶たれる現実。ここにも複雑化する時代が反映されている。

自治体や民間団体が連携した「駆け込み寺」的な機能を果たす相談会などが各地にあるが、実際の僧侶たちが活動する「自死・自殺に向き合う僧侶の会」は、僧侶が取り組めるいくつかの活動を柱にしている。その一つが手書きによる往復書簡だ。

会の書簡事務局には、主に自死念慮者から月平均六〇通の手紙が届く。これまでの総数は五三四九通（十一月十七日現在）。送られてきた手紙は、事務局を担当する前田有全さんが電子データ化、パスワード付きの電子メールにして担当の僧侶に送信する。返信を担当する僧侶は一人だが、三人で一班を構成しており、担当者が作った返信文案を他の二人がチェック、表現や関わり方が適切かどうかなどを協議し、精度の高い文章に練り上げていく。それを最終的に担当者が手書きで清書し、個人名で投函する仕組みだ。現在は九

班態勢で臨む。手紙の原本や担当者が出した返信のコピーは事務局でファイリングされるが、一定程度まとまった段階で「お焚き上げ」されている。

手紙は多種多様だ。「死にたい」とひと言だけのものもあれば、A4用紙に何十枚にもわたるものもある。涙でにじんでいたりと、血がついていたりと、手紙そのものから受け取れるメッセージは数多い、と前田さんは言う。

「生きたいから手紙を書いてくれる。それをわれわれは忘れてはいけない。生きてほしい、一人で悩まないで。そういうメッセージも込めて手書きで返信しています」

そうした書簡は、差出人と僧侶の間で何度も行き交う。やりとりが一〇〇通を超えるケースもある。それではどのような手紙が舞い込むのだろうか。

手紙

「和尚さん、お寺のおばちゃん、いのち、生きるってなんですか。ママはう

つ病で家で寝ていて、お酒を飲んでいきます。それでもお父さんは殴ります。家の中はめちゃめちゃ。あざもできます。こんな家は大嫌い。学校でみんなの話を聞くと、涙が止まらない。死ぬのはいけないのですか。生きる意味はありますか。天国でパパに会いたい」

五月八日夜、東京都文京区本郷にある東京大学仏教青年会会館ホール。

「自死・自殺に向き合う僧侶の会」の藤尾聡允さんが壇上で手紙を朗読すると、ホール内に水を打ったような静けさが訪れた。文章はもちろん、実例ではなく藤尾さんの手による創作だ。ただ、それを知りながらも、ぎっしりと会場を埋め尽くした僧侶たちは肅然とした面持ちで聞き入っていた。

「どんな相手を思い浮かべましたか」

藤尾さんが畳み掛ける。

「どこに焦点を当てて返事を出しますか。生きる意味について、分かりやすく説きますか。『死ぬのはいけない、命は尊い授かり物だ』と噛み砕いて説

明しますか。『児童相談所に行きなさい』と言いますか。実際に通報しますか」

「仏教者は現代社会のなかで、人々のところにどのように寄り添うことができるのか」をテーマとした「臨床仏教師」養成のための開講記念講座の二コマだ。「臨床仏教師」とは聞き慣れない名前だが、欧米の施設付き聖職者「チャプレン」を念頭に、社会苦と向き合う僧侶を養成しようと、全国青年教化協議会と関連の臨床仏教研究所が設けた新しい資格である。

本誌二〇一三年新年号で、公共性を帯びた宗教者「臨床宗教師」の誕生を取り上げたが（「臨床宗教師」は闇の中の道標となるか）、これを仏教者に特化したバージョンといえる。座学とワークショップ、実践研修を経た上で認定される資格で、創設を推進してきた神仁、臨床仏教研究所上席研究員は「臨床仏教師は、ターミナルケアだけではなく、さまざまな生老病死にまつ

わる苦しみに対応できる者を養成するのが目的」と語り、僧侶が向き合うべき「苦」の一つとして自死問題の重要性を強調する。

登壇した藤尾さんは、神奈川県横須賀市にある臨済宗建長寺派獨逸寺の住職。ビジネスマンとして長く海外で活躍した後、僧侶になった。地元で障害者支援のボランティアや外国人への座禅指導を行う中、自死に関わる相談や葬儀に立ち会うことが増えたことが現在の活動に結びついた。

「外国で仕事をした経験の中で、人種や宗教に限らず『ころ』がどのようか、死にたい気持ちがあるのか、病んでいくか、目の当たりにしてきた。それが根底にあります」と語った後、手紙の返信例を読み上げた。

「つらい気持ちが伝わってきた」ことや「和尚さんも涙が止まらなくなかった」ことを記し、「とても心配」なので「もう少し気持ちを聞かせてほしい」と伝えた。

ように思い、心配になった」と答える一人の僧侶。「そう思ったのはなぜか？」と重ねて質問が飛ぶ。そんなやりとりが続く。

この日、神奈川県平塚市の浄土宗浄信寺住職吉田健一さんが返信した手紙も映写され、検討が行われた。無骨な文字に飾り気のない文章。ただ、相談者の体調を気遣う気持ちがストレートに伝わってくる。吉田さんが僧侶の会の活動に関わるようになったのは約五年前。「自分には無理だと思っていたんですが、最初に手紙を読んだ瞬間、スイッチが入ったんですよ。自死という一般的な社会問題が『あなた』と『私』の関係になりました」と話す。

学生時代、希望が持てない日々を過ごしたという吉田さん。生きづらさを抱えてきたからこそ、自らの過去の姿や未来の姿に、生きづらさを抱える人たちの姿が重なる。葬儀社勤務の経験がある異色の僧侶であり、死をめぐる生々しい現実を数多く目にしてきたこ

い」と伝えた後、「どうすればいいか一緒に考えていきたい」旨がつづられていた。聴いているうち、相手と思うぬくもりがじんわりと胸に染み込んでくる。藤尾さんは「未完成で六〇点ぐらいの出来」と前置きした上で、「仏教の『ぶ』の字も出てきませんね。どうでしょう、心に響きますか」と僧侶たちに問い掛けた。

「よくがんばってきいたねとねぎらっても、もうすこしががんばってみたいとは思わない。本当につらかったでしょう、とは言っても、みんなつらいんですよ、とは言いません」

インターネット全盛の時代、あえて手紙という手段で相手の心に思いを届ける。電子メールだと読み返すことがほほえない、と思うからだ。確かに宗教色はないが、中にはお守りのように、常に肌身離さず持っている相談者もいるという。そのため欠かせないのが内部での研鑽。実際の手紙をどう受け止めて返信し、どんな検証作業が行われ

とが社会苦に向き合う姿勢の根底にある。手紙はケース・バイ・ケースの対応であり、その人が持つリアリティを大切にしたいと語る。

そんな吉田さんの手紙を「温かい」と言うのは、会のメンバーである東京都府中市の浄土宗蓮宝寺副住職小川有閑さんだ。相談者と対面するのではなく、縁側に二人で座って庭を見ながら「世の中、生きにくいよね」と話す感覚があり、そこに温かみを感じる理由があるのだと小川さんは考える。

遺族

小川さんは、大正大学BSR研究所研究員の肩書を持つ三十代の宗教学者でもある。僧侶として自死対策に取り組む傍ら、この問題の研究を進める。ある論文で「自死者は遺族にとって生前よりもはるかに強大な存在感を持つ」と書いた。自殺で亡くなった人は理由を語らない。大切な人を亡くした遺族にとってどれほど考えても「な

ているのか。具体的な内容は記さないとの誓約書を書き、手紙を検証する会合に出た。

検証

東京都中央区の築地本願寺第一伝道会館。薄暗くした畳敷きの部屋で、僧侶の会のメンバーがテーブルを取り囲むように座っている。全員が視線の先にはスクリーン。パソコンの前に座った往復書簡事務局担当の前田さんが、届いた自死念慮者からの手紙を映写している。乱れた字形から苦しみが伝わってくるかのようだ。幅広い年齢層の十数人の男女が、読み上げられる手紙の内容をじっと聴いている。重い沈黙の後、読経で鍛えた太い声が響いた。「主訴は何だと思えますか」。相談者の訴えを見極めようと、真剣なやりとりが続く。ただ、この場でも個人を特定する情報は出ない。返信された手紙も組上に上る。「この文面にした理由は？」との問いに「切羽詰まっている

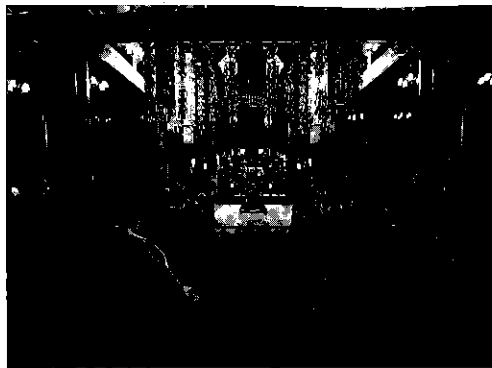
ぜ」が集積していくだけだ。

「自死遺族には、尋ねたい自死者の思い、伝えたい自死者への思いが、とどまることなく溢れ続ける。そのために自死遺族には猛烈な対話希求におそわれるのである」と指摘する。さらに「自死遺族と向き合うなかで、葬式仏教が積み重ねてきた何かが、自死遺族支援の中で有効に機能するのではないかとこの仮説をいなくようになった。遺族から『自死した人は成仏できないと聞くが、今も苦しんでいるのか』(中略)といった苦しい胸の内を聞くことは多い」(『現代宗教2011』所収「自死者のゆくえ」と記す。

自死と成仏——。取材を通し、数多く遭遇した悲しい一双の図だった。仏教が深く浸透したこの国で、多くの自死遺族にのしかかる答えの出ない問い。問題に取り組む僧侶の多くが、遺族からこの問いを投げ掛けられた経験を持つ。一方、菩提寺の住職から「自殺したら、成仏できない」と言われた遺族

も多い。「社会的に追い込まれた死」という認識が広まる中、僧侶は自殺をどのように考えているのだろうか。この点を解明しようとしたのが、浄土真宗本願寺派総合研究所（旧教学伝道研究センター）が二〇〇八年、全国の同派寺院を対象に行った「自死問題実態調査」だ。

「自死は命を粗末にしていると思う」との設問に、「思う」と「やや思う」を合わせると六八・七％。最も興味深いのは「自死は仏教の教えに反していると思うか」で、「思う」「やや思う」で七四・一％にも及ぶ。また、日蓮宗が二〇〇九年に行った同様の調査によると、「いかなる理由にせよ自死は認められない」が六六・七％で、そのうち八五・三％が「自死は仏教の教えに反していると思う」と回答している。いずれにせよ、こうした僧侶の意識が、遺族に向けられる「自死者は成仏しない」に結びつき、それが一般にも広がっている可能性が高い。



自死者追悼法要（自死・自殺に向き合う僧侶の会提供）

演じる。進行役僧侶、補佐役僧侶、娘を亡くした二人の親という設定だ。研修の僧侶たちが真剣な眼差しで見詰める中、ロールプレイが始まった。「ご発言ください」。進行役の僧侶が口を開く。女性が絞り出すように声を出す。「娘を自死で亡くしました」。親戚や近所の人に娘の死を知らせず、葬式も出していない旨を切々と語る。別の親役

僧侶の会のメンバーで、『悲しむ力』の著書がある真宗大谷派僧侶の中下大樹さんは、生活困窮者への葬送支援や孤立死防止の見回り活動を行っている。自死問題にも長く取り組んでいるが、遺族と接して関係性ができると必ず「成仏」について問われるという。

「亡くなった子は、母は、父は、天国に行けていないんじゃないか。自分で命を絶つと、成仏できないんじゃないか。地獄に落ちていくんじゃないか」そんな言葉がお酒の席などでポロリとこぼれ落ちてくるという。中下さんはその際、はっきりこう言う。

「大丈夫です。自殺したら地獄に行くなんて、釈迦は一切言っていない」本願寺派の調査報告書は、原始仏典の中で釈尊が自死した弟子を非難してないという対応を指摘する。「生きてほしい」というメッセージとともに「亡くなり方」に関する価値判断をしないという仏典の記述は、現代の自死問題に僧侶が関わっていく上で重要な

示唆を与えてくれる、と記している。

ロールプレイング

「自死で亡くなった方の遺族を知らず知らずに傷つけていることもあるのではないだろうか。遺族がどんな立場にいるか知ると、自死者のご葬儀やご法事での対応が変わってくるかと思えます」

六月に開かれた日蓮宗宗務院での実践社会活動研修会。東京都大田区の日蓮宗永寿院住職吉田尚英（しやうえい）さんは、集まった僧侶に静かに問い掛けた。僧侶の会の中心メンバーの一人。会にとって自死念慮者への往復書簡を通したやりとりとともに、自死遺族へのケアも大きな活動の一つ。抱え込んできた思いを語るところがなかった遺族同士の分かち合いの会を毎月開催している。僧侶の会が実施する分かち合いの様子を、日蓮宗僧侶に模擬体験してもらう試みが行われた。

まずは会のメンバーがモデルとして

の男性も数年前に亡くした娘の死因を隠して葬儀をしたつらい気持ち話を話す。「娘に申し訳ない思いでいっぱい。自殺は成仏できないといいますが……」。緊張感あふれるロールプレイが終了し、見ていた僧侶たちが大きく息を吐いた。吉田さんが言う。「実際の会はこんな感じですよ」。メモは取らない、不必要にまとめない、沈黙の時間の大切さ、仏教的な質問が出た際の答え方の注意点など、僧侶が守るべき点を吉田さんは挙げ、さらに互いの立場が違うため、遺族同士のアドバイスを避けるなど、遺族がぶつからないよう細心の注意を払って進行役や補佐役が運営する点も示した。「成仏していませんか」は頻繁に出ます。そのときにいきなり自分の教義や信仰を話すと、一方通行になる。どういふ思いをしたからそれを知りたいのかを聞く。僧侶としての生き方が問われる瞬間です」。

そして、自死遺族への対応における僧侶の会のもう一つの柱は「いのちの

日 いのちの時間」と題した自死者追悼法要だ。毎年十二月に営んでいる。遺族は一樣ではない。近しい親族から配偶者を亡くした点を責められるケースも多い。子どもを亡くした悲しみを紛らわせるため働いて、働いて、働き続けているのに、元氣になったと勘違いされて苦しむケースもある。

そういった人たちに心ゆくまで涙を流してもらおう場所が追悼法要だ。会のメンバーは言う。「苦しみの多い日常から離れた荘厳な空間の中に身を委ね、安心して愛する人と向き合える場が必要なのです」。

遺族が大切な人と向き合う時間は、宗教的な空間でこそ実現する。それは、自死と成仏をめぐる果てしない問いを包み込む場なのかもしれない。

にしでたけし 一九六一年京都府生まれ。同志社大学卒業。八五年に共同通信社入社、浦和、長崎、京都支局を経て文化部。二〇一一年より現職。宗教界を長年取材し、現在「こころ」のページを担当。